

「幼 児 教 育」

— Childhood Education —

三・四月号の内容紹介

三月号の題「隠された人間資源」を見て
私は一瞬、日本の「人造り」という言葉を
思いだした。しかし、内容はそのような表
面的なものではなかった。すべての記事が
一口に子供を人間として尊重し、
ひとり一人の可能性をフルに發揮させたい

という主張に基づいていた。

メリラント大学のシェームズ・ラス氏の
巻頭文には、まず教師の問題が提示されて
いる。

「一九世紀には人権がひどく蹂躪された
史実があるが、二〇世紀の今日においてな
お、別な形態で学校の教師たちの手で子
もたちの伸びるべき人間尊厳の芽がそこな
われているのである。

第一に教師というものは子どもの行動や
表現を見て正しく判断を下す者が少い。す
ぐ、この行動は良いか悪いか、正しいか間
違っていか、プラスかマイナスかを考え
たがる。こうした批判の根拠には先生のプ
ライヘートな経験や感情がものをいう。こ
れは人間の尊厳への不信、すなわち、誰で
も個性的に異った考えを持ち、ユニークな
行動をする権利があることを無視している
ことになる。真の教育の成果は、単なる教
育方法や教材の問題によるものだけではな
く、教師が個々の子どもと彼らのもってい

る考えをどれだけ受け入れるかということ
にかかっている。

第二に教師はよく子どもたちの能力や態
度が必要以上に重視して、子どもたちは注
意力がないとか、怠惰である、将来性がな
いなどという。このような否定的な解釈は
案外ちよつとした個人的偏見や集団テスト
などたいした意義のないものももっともら
しい根拠になったりしている。

第三に教師は子どもたちが未熟であるこ
とを理由に、ゆるやかな限度内で選択を与
えることをさせたがらない。そして簡単に
子どもたちの夢や希望をとりあげて、自主
性の芽をつみとってしまっている。

このように絶対的存在になり易い教師で
はあるが、監督教師の手助けを借りたり、
テープ・レコーダーなどをつかって実状を
調査することができらう。そうすれば
安易な判断をしたり、ものごとをこじつけ
て考えたり、子どもの選択をおさえたりす
ることをいくらかでもひかえることができ

るようになるかもしれない」

ニューヨーク市の衛生局で child care の
コンサルタントをしている S・コールドス
ミス氏は「Begin Early」と題して乳、幼児
の所有している人間資源を成長させるため
に、人間関係、家庭と学校の問題、集団経
験などについて述べている。

その中でも成長のための環境として知覚
できるものと、知覚できないものをあげて
いる。すなわち園内外の充分なスペース、
安全な物的環境、機能的に配置された遊
具、よく整えられた栄養食、ゆっくりした
休憩時間、ゆきとどいた組織と管理などを
intangible なものとしてあげている。次に
intangible なものとしてかなりのスペース
がさかれている。

どのように豊富な知的教材と完全な管理
のもとにあっても、なお、知的、情緒的な
雰囲気欠ける場合がしばしばあること、
大切な intangible な雰囲気を作るのは教師
の質によるものであること、これを測定す

る方法として子どもをよく見るようにと述
べている。

「子どもたちは活動に打ち込んでいるか、
人間らしく動いているか、命令を待つ人形
のようであるか、顔の表情はいきいきか、
それとも落ちつかず飽きあきしているか、
興味のある活動がなされているときに起っ
てくる自然な活気のある空気か、それとも
大きな合図でシーンとなった静けさか、質
間がなされ、キチンと答えられているか、
子どもは彼らなりの自信を持っているか、
人間として尊重されているか、単なる自動
的な機械としてみなされているか、ものご
とをすぐ試してみたり、間違えもしたり、
自分の考えで判断をしたり、技術を磨いた
り忍耐したりするチャンスが与えられてい
るか、それとも先生のやり方だけが絶対に
良いとされているか、頭も体も心に充分に
伸び伸びとされているか、それとも先生のこ
都合主義できれいなことにおさめられている
か」

この稿の最後に記してある子どものこと
ばは興味深い。彼は何年前か前、ヴァサー・
ナーサリー・スクールの園児であって、園
庭に穴を掘りながらこうつぶやいた。

「穴 (hole) ってなんだい？ 何かだけ
ど、何でもない。穴って、何でもないけど
あんまりなんでもないから、何かなのね。

……何でもないものに名前があるなんてお
かしいね。穴を作るために取っちゃった何
かなんて呼ぶの？ Whole っていうのは
何か取っちゃった残りでなく「全部」って
ことじゃないの？」先生「Whole と hole
と同じにきこえるけれど違う意味の言葉で
すよ」でもおなじにきこえて、反対の意
味があるなんて間違えちゃうよ。おなじ言
葉をきいてなんて考えるの？ 反対？ 間
違いだね。誰が言葉作ったの？」

またある日、「声ってウンと早いね。声
って音だよ！ 他の音も何かの声なの？」
「……言葉ってつかめないよ。でも、も
し言葉が何かで作ってあったら、あのネー

何か、ほんとのものでサ、さわったりできるものだったら……そしたら、世界中が言葉で一杯になっちゃうね。なんでも言葉がかぶっちゃう。——水みたいに。溺れるかもしれないよ。だって喋ってばかりいる人もあるもの……」

幼児は生きている不思議さにまともにもふれている。早期開始の真の意義を理解する保育者には、子どもと接触しながら、この要素が少しでも乗りうつるかもしれないと結んでいる。

四月号「世界の豊かな賜物」と題し、世界に満ちた豊富な資源の知識を把握し、これを管理、保護するばかりでなく、さらにこれを開発していかなければならないということに集中している。

ロサンゼルス の初等教育のコンサルタント、B・ストラサー氏は Affecting and Reflecting と題して資源保護教育について具体的な方向を示している。

……あるときひどい嵐があり、小学校は臨時休業となった。再び学校が始まって教室にもどってきた一年生は活発な話し合いを始めた。

「道路の溝の所にどろやごみが一杯だよ」
「まだ庭に大きい水たまりがある」

「芝生にひびや小ちやい川がたくさんできてしまった」

自然は明らかに子どもたちの注意力を捉え、問題に直面させた。先生はこの時期をとらえて子どもたちがものごとを適確に観察するチャンスとしたいと思った。

そして散歩に行ったり近辺を観察させたり、話し合いをした。このような経験のよりこまれたカリキュラムが行われることにより、子どもたちは自然の法則を知り、自分たちも自然に対して何かの影響を与え、ある変化をもたらすことができることを知るようになった。

子どもたちには、まず直接経験を与え、質問をきいてやり、答えてやるが必要

である。しかしそれだけでは不十分である。ある人がいつているように「経験によって学ぶのではなく、経験について深く考えることによって学ぶものである」

水が地面の上を流れているのを見させるだけでは「水はどろや小石を流す」ということにはならない。この抽象的な段階に考えを及ぼさせるには、そのことに関する教師の明晰な理解と「みぞの中の水はどうなっている？」とか「何か運んでいるみたいね」といったような適切な助言が必要である。つまり単なる経験に止まるだけでなく、それを知識と能力にまで結びつけるには指導者のガイダンスがもっとも大切なものとなる。

次に知識と能力が次第に責任をもった自主的な行動にかわっていくためにはものごとに対する価値感が橋渡しとなるものである。

ここで同誌一九五九年二月号のL・E・ラス氏の“Values are Fundamental”の1

端が引用されている。

「価値感には人に与えることはできない。

自らが識別し選択して、あることに価値を感じるところからくる」

このように価値感を持つには子ども自身
がそれを生活しなければならぬ。価値感
という大人の概念で抽象的なことを考え
易いが、前述の先生は子どもの発達段階を
考えたうえで、彼らの日常の問題を用いて
価値を体得する経験を与えた。

子どもたちが学校や家の芝ふが水の流れ
によって侵蝕されていることを発見したと
き先生のなげかけた問いによって価値を感
ずるか感じないかの新しい問題に直面し
た。

水がどんどん土を運んでいく。

芝ふがダメになる。

これについて、どう思うか。

これはいいことか、何故よくないか？

何かした方がいいか。

何ができるだろう。

再び新しい問題提起、「何もしなかった
らどうなるだろう」そして、皆で水を止め
よう、いや別の通路をつくらなければなら
ない。手わけしてやろう、学校だけでなく
近所のところもしようということになって
いった。

資源保護の概念は土地侵蝕の問題だけに
限らない。樹木の成長は長い年月がかかる
ということ、誰かが樹木にきずをつけたり
すると、どういう損失になるか。

花は種子を造り、種子は植物を造る。こ
れは植物の知識の中で自然界の秩序あるリ
ズムを感じとらせるだけではない。さらに
考えもなく道端の花を取ると結果的にどう
いうことになるか、など大切な問題があ
る。

庭に出した箱積木をしまうとき車輪のつ
いた運搬道具をつかったら四人でかかるこ
ころが半分の手でできた。今度から何人て
できるだろう。車のついた道具をつかうと
皆で働きやすいか？ など。

人間の行動に変化を起させるまでにその
価値感や知識、能力を發展させるには時間
がかかるし、これは一生継続く仕事であ
る。そのため惜しまずに子どもたちに時間
とチャンスを与えて深く考えさせてやるこ
とである。資源保護教育をするに当ってよ
り行動的な概念を競うことが私たちの責務
である。

最後に、故ケネディ氏が一九六二年米國
の国会で言った演説の一端を引用してい
る。「資源保護の実行についてわれわれは
再考を要する時に至っている……これこそ
は国家的節約の最も高度な型式であろう。
無駄と破壊を防ぎ、次の世代をめざして資
源の保護をはかりつつ、その質と有効さを
高めていくべきである……」

この号は科学や自然や社会の教育が単に
近視眼的なカリキュラムのワクにおさめら
れるべきものではなく、広く時代を反映し
行来にまでも努力と希望がつかっている
感じがよくていた。

(K)